# (131) 栃木県鹿沼市の東加蘇（上久我）鉱山

参考文献（１)、(２）を手引きに探査を行い，現地を確認した。マンガン鉱山である。２つの参考文献を比較すると、文献（１）では、「東加蘇」、文献（２）では「上久我」の鉱山名となっていた。表題には２つの名前を列記することにした。同じ鉱床ながら、事業鉱山としての鉱山名が変更される例が良くある。経営者が変わった場合、富鉱脈が見つかること、鉱山の繁栄等を期しての名称変更など、理由はいろいろあるようである。

探査に好都合であったのは，文献（１）に現地の案内図が掲載されていたことである。しかし、この文献の発行年からすると、案内図は少なくとも３２年以上前のものである。が、事前調査の一つとして、その案内図と、現在の地形図（２０１４年）を対比してみた。現地までの林道は、両図で「全く同じに」見えた。これならば、探査は容易であると考え、１回目の探査に出かけた。林道は車の通行は可であり、文献（１）の通り曲がりくねってもいる。文献によれば、林道からズリが見える、と書いてあった。しかし現在は鬱蒼とした背の高い杉林となっている。下草も厚い。多分、この当たりであろうと見当をつけたところでは、沢で、マンガン鉱石の転石を幾つか見つけただけであった。

案内図が不正確の場合もあろう。林道の下と上の方にも行って、沢の左岸の方を注意深く観察したが、何の鉱山跡の兆候も見つけられなかった。が、沢にマンガン鉱石の転石を見つけたと言うことを、成果の１つとして、帰宅した。

その後、思案をしていた。現地で、林道脇の広い空きスペースに，車を止めたが、この空きスペースの先が林道らしくなっており（当日は多数の倒木で林道が覆われており、見分けが付かない状況であったが)、石垣で補強もされていることに気がついた。林道であることは確実である。この「隠れていた」林道こそが、文献（１）で書いていた林道に違いないと推論した。この旧林道は現在の林道とほぼ同じように、曲がりくねって沢を巻いてたからである。文献（１）の案内図中の現地付近の林道の曲がり具合は、現在の地形図に記されている林道の曲がり具合とウリ２つである。沢側にあった旧林道に対して、新林道が同形状で山側に開削されたようである。

漸く、３回目の探査で，鉱山跡を確認した。沢沿いに小さい鉱山施設跡、そこから山の斜面を登ったところに幾つかの坑口跡があった。周り一帯にはズリがあったが、表面観察だけの観察では，めぼしい標本は採集できなかった。

現地への経路は次の通りである。鹿沼市中から西方へ２４０号を進んでいく。荒井川沿いに進み、和田内地区で、北に延びている狭い村道に入って行く（写真１)。村道は直ぐに，林道となり、沢の左岸に延びているが、村道入口から約１ｋｍ当たりで橋を渡り、沢の右岸を走るようになる。橋から約２５０ｍ付近、進んできた林道の右側に枝林道がある（写真２)。この枝林道が，文献（１）で記している林道であると判断した。つまり旧林道である。探査期間時は、倒木が多く（２月の大雪が原因)，車では，先に進めない。入口付近に車を止めた。旧林道を５分ほど進むと、沢の対岸に石垣組が見える（写真３)。石垣の上は少し開けている。林道の適当なところで沢を渡って、対岸に登り上がる。石垣で補強されたプラトー部には、ボルト付きのコンクリート基台があった（写真４)。鉱山施設跡で見かけられる、ウインチか，エンジンか、コンプレッサーを固定しているコンクリート基台そのものである。鉱山施設跡であると判断した。周りには、坑口跡は見えない。道もない。意を決して、目前の杉林の斜面を登り上がることとした。その結果、幾つかの坑口跡、ズリ、を確認した。最初の坑口跡へは、１０分程度の登りで行き着ける。その上の方にも坑口跡がある。最初の坑口跡から，右上方へ登って行くと、尾根に行き着く。尾根を進むこと直ぐである（写真５，６，７)。

探査日　　２０１４年３月

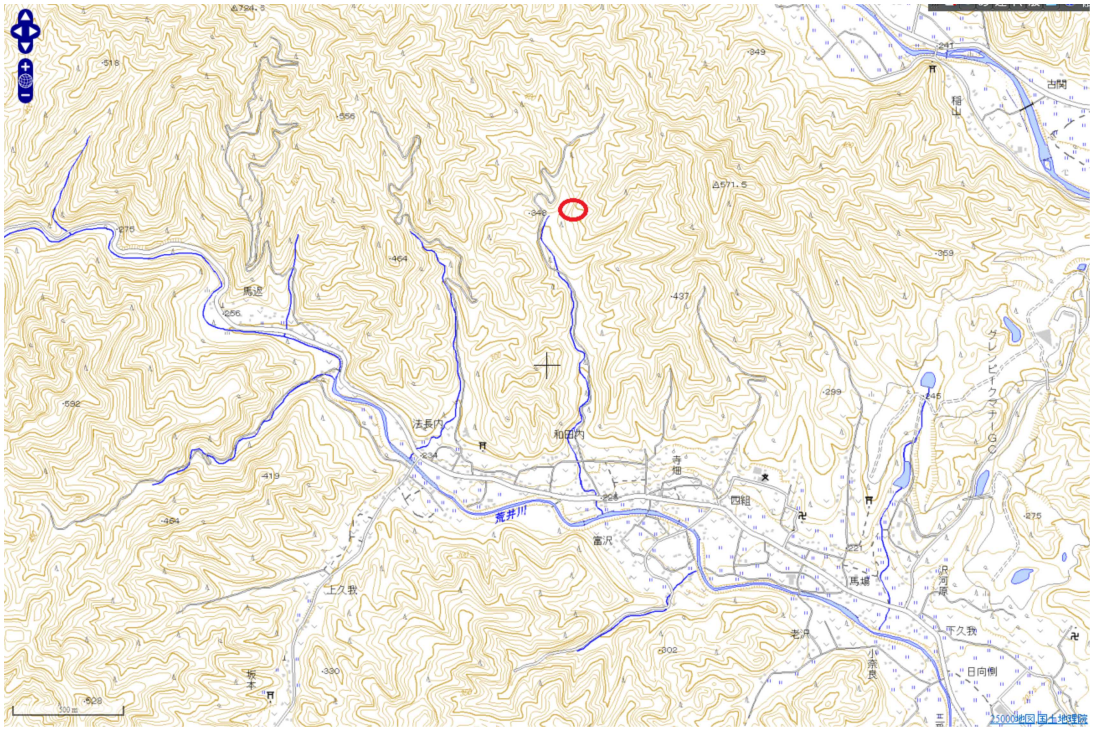



図１　Ｙａｈｏｏの地図サービスより複写掲載。鹿沼市より２４０号を進んできて、和田内のところで，沢に沿って北に延びている村道に入って行く。この付近、北向きの村道が沢山ある。入口は写真１を参考にすると良い。赤丸当たりが鉱山跡。現地付近まで車で通行可（２０１４年春)。

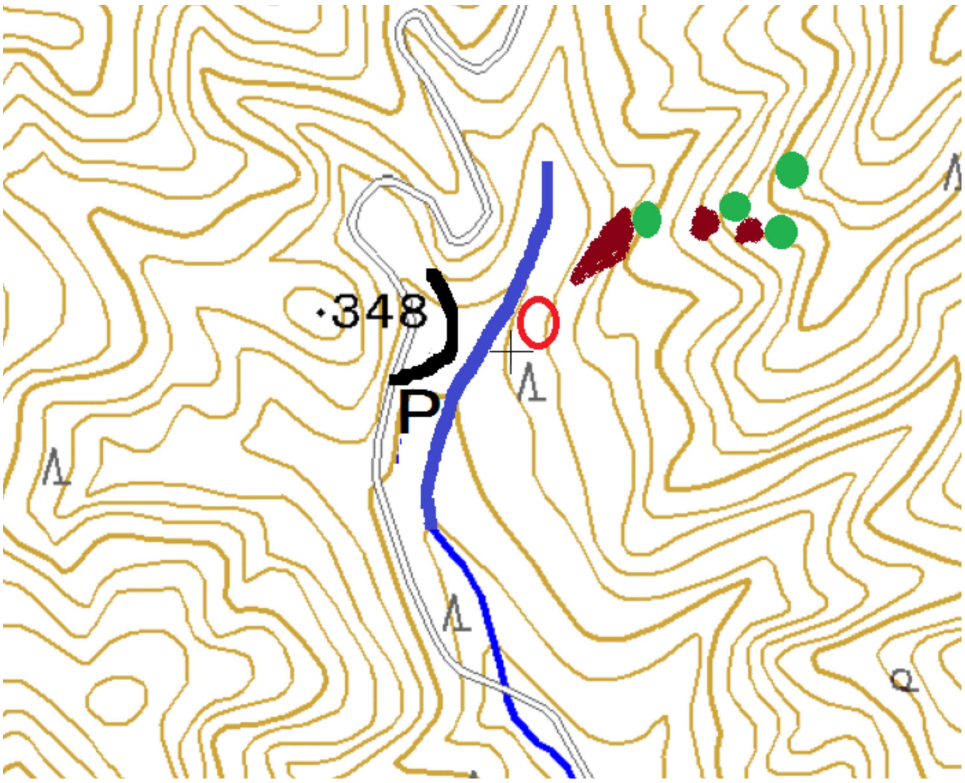
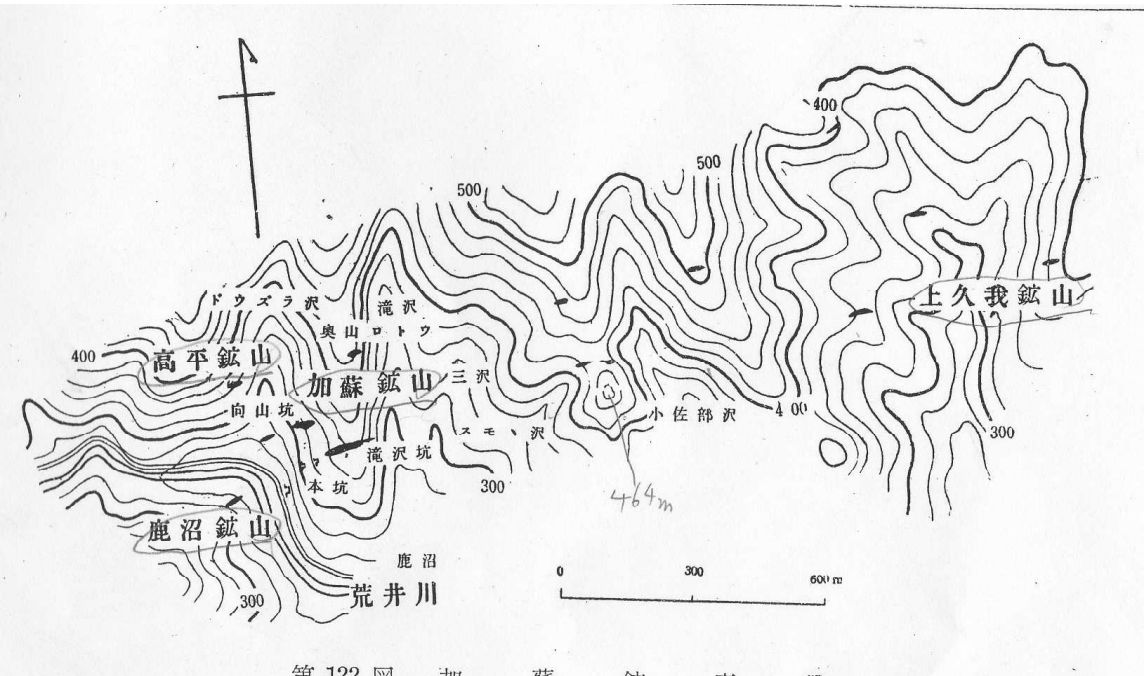



図２　図１の部分の拡大図に相当。黒線は書き込んだ旧林道。Ｐは車の停車場所。赤丸は鉱山施設跡。黄緑丸が坑口跡。茶色ベタがズリ。坑口跡の上３つは、ほぼ尾根上にある。地形図中に記されている現地付近の等高線の分布が少し現地の実地形と合っていないような気がする。なを、地形図中の沢の記述が全くおかしかったので，少し修正をしている。沢を渡っての鉱山跡より先には林道は見つけていない。適当に上に登って行く。杉林の中なので，足下は枯れ草、枯れ枝なので、歩きやすい。




第 122 図　加　蘇　鉱　床　帯

図３　参考文献（２）より。既報でもある加蘇鉱山、高平鉱山の位置を参考にすると、この文献の上久我鉱山は、参考文献（１）の東加蘇鉱山と同じであると判断した。図中の右端にある文字「上久我鉱山」のうちの文字「鉱山」の上の黒印の鉱床がそれらに当たっているようである。探査時、林道で出会った伐採作業をしていた人に聞くと、主林道のもっと先の方に，坑口らしいのがあると教えてくれた。図中の文字「上」の上の方に位置している鉱床の坑口跡なのかもしれない。

# 鉱山跡写真

写真１　和田内地区の、この所で、荒井川に沿って進んできた２４０号から、北に延びている、この村道に入って行く。先は直ぐに林道となる。

写真２　村道入口から１．２ｋｍから１．３ｋｍ当たり。進んできた林道の右側に、枝林道がある。捨てられ、忘れられた旧林道である。草木が生い茂った時期には、入口付近が隠されるかもしれない。この地点の左側には地形図中の・３４８の小山が見える。この小山の杉の木が伐採されているので（探査時)、よく見える。目印にはなるであろう。入口当たりには、車は入れようが、その先は倒木が多くて、車は進めなかった。入口付近に車を止める。

写真３　旧林道を歩いて５分ほどで、右側の対岸に石垣組が見える。鉱山施設跡の石垣組である。適当な箇所を見つけて，向こう側に渡る。

写真４　石垣組の上部は少し開けた場所となっていた。真ん中当たりに、ボルトの立っているコンクリート基台があった。２本のボルトはハンマーの頭の両側。鉱山施設で機械の固定用に良く用いられている形である。周り一帯にマンガン鉱の転石が落ちている。

写真５　写真４のところから、先には林道は見つけられなかったので、山の斜面を直登気味に登った。登りに１０分ほどか。そこで見つけた坑口跡。周りは倒木だらけであった。草木が生い茂った時期には見つけにくいかもしれない。

写真６　写真５の坑口の入口付近の様子。綺麗でしっかりしている。

写真７　写真５のところから、斜面の右上方へ登り上がると尾根に出る。尾根上に幾つかの坑口があった。そのうちの１つ。尾根上にはマンガン鉱脈が露出している。が、余り品位は高くないようである。良鉱ならば、採鉱して搬出済みか。

# 鉱物写真

　　写真８　現地で黒くて重そうな石を割ってみた。綺麗なピンク色の破断面が見えた。周りの黒いところは酸化マンガン、ピンク部はバラ輝石。写真に撮っただけ。

# 参考文献

（１）「鉱物採集の旅－１　東京周辺を訪ねて」、加藤＋松原、築地書館、１９８２年。
（２）「日本のマンガン鉱床」、吉村豊文、マンガン研究会資料、１９５２年。